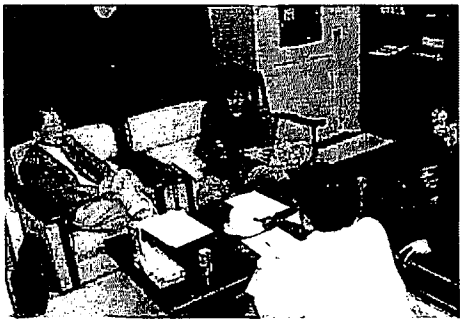
12月11日の「大学史懇談会」についての報告と感想

大学史事務室　佃　　隆一郎

去る12月11日（木）の12時30分より２時間ほど、越知客員研究員のお計らいによりまして、大学記念館２階の同氏研究室にて昼食をとりながら、大島客員研究員（名誉教授）のお話を聞く機会をいただきました。参加者は私のほか、東亜同文書院大学記念センター事務室の豊田氏と、リサーチ・アシスタントの広中氏でした。

大島氏はまず、ご自身が研究者として自立するまでの過程を振り返られ、続いて愛知大学に就職されてから今日までの“山あり谷あり”の研究活動を述壊されました。さらに大島氏は、現在の主要研究命題である「東亜同文書院の質的変化」について「正から反、さらには合へ」との仮説を提示され、高等教育史の中で位置づければ全体の解明につながるのではないかと結ばれました。最後の質疑応答では広中氏が積極的な意見を出したことで、議論が白熱化しかつ深まるものになった感がありました。私としましては、大島氏の特に前半のお言葉から、単に“まぐれ”を待つのみではチャンスはやって来ない（から常に前向きに努力しなければならない）ことを再認識することができた「懇談会」となりました。